

「第11回研修会」に63名

1月18日 北区赤羽文化センターにて

去る1月18日、北区赤羽文化センターにて、第11回研修会が開催されました。

指導員や保護者の実践・運動の力量を高めようと、毎年様々なテーマで行なっている研修会。今回は、新人指導員対象の研修も盛り込み、全体研修と合わせて2部構成で行ないました。21グループから63名の参加者があり、おおいに学び合いました。

新人研修「子どもの成長を見続けて」

講師：近藤すみ子氏（世田谷区・わんぱくクラブ指導員）

午前中は、放課後グループの先輩指導員、近藤さんから、新人指導員に向けてお話をいただきました。

◎人の輪—自分が支えているという思いの結集

わんぱくクラブ創設から、指導員として21年間勤務し、今年3月に定年を迎えられる近藤さん。わんぱくクラブに勤務する前は、教育現場で、障害のある子どもや保護者との出会いを経験されました。現在の近藤さんの芯となるような言葉を投げかけたお母さん、「命を預かる」仕事だということ子どもとの関わりから示した同僚、エネルギーあふれる子どもたち。

その後、ご自身のお子さんが学童保育クラブに入り、そのクラブを何とかしようと近隣にあった民間の学童保育の指導員になり、そこで保護者と話し合って集団作りをしてきたことが、わんぱくクラブを作る基礎となったそうです。



1987年に20名でスタートしたわんぱくクラブも、現在100名を超す大所帯。そこまでわんぱくクラブを大きくしてきたものは、「人の輪」—「子どものために、ということだけで、みんなが我慢し合わなかったのが良かった。指導員も、お金がないからボランティアで良いとは思わなかった。それは、プロとして給料をもらって仕事をしているという自覚があるからこそ。保護者、指導員など、それぞれの立場の人が、それぞれの思いをぶつけ合い、歩み寄ることでわんぱくクラブは作られてきた。あるお父さんが、「良い保育をして

放課後連・東京ニュース

《No. 83》2009年2月16日
障害児放課後グループ連絡会・東京
(放課後連・東京)

江東区扇橋3-3-7 2階 さくらんぼ子ども教室
〒135-0011 TEL・FAX 03(5683)0871

もらっているというだけでわんぱくにいるわけではない。自分たちもわんぱくを支えている一員だという誇りがある」と言われた。そんなふうには、「私がいるからこそここは成り立っている」と、一人ひとりが思っていることの大切さを感じる」と、近藤さんは言われました。

◎心がけてきたこと—若い人たちに

プロ意識を持って仕事をするにあたり、近藤さんが心がけてきたこと。それは、「子どもにとって良いと思うことは、周りの人と相談し、すぐに実行する」「失敗しても落ち込まない。同じ失敗を繰り返さない」と心がける。その失敗から何を学ぶかがその人の未来を作る。「自分が何をしたいのか見失わない。人の評価を基準にしない」などです。

また、特に若い人に向けて、「自分に自信を持ってほしい。自分は自分、世界に1人しかいない。まず自分を知ることが大切。自分が自分らしくないと、子どもにも正面から向き合えない。短所を直そうと思わず、

良いところを伸ばしていこう。自分の殻を破り、自分を表現できることも大切」と、励まされました。

◎保育のプロとは—困難を解決することを楽しむ

近藤さんが新人教員だった頃、先輩教員の授業見学を断られ、失望したと言います。それ以来、「常に、誰に見られても大丈夫」という姿勢で仕事をしてこられた近藤さん。

最後に、ある医師の言葉を紹介してくださいました。「プロとは、困難にぶつかった時に、前向きに考えて解決していくことを楽しめること」——近藤さん自身が、そのように取り組んでこられたことを実感させる、重みのある言葉でした。

全体研修「障害者施策と放課後活動をめぐる情勢」

講師：森川鉄雄氏（全国放課後連事務局）

中村尚子氏（立正大学社会福祉学部准教授）

午後は、放課後活動に関する制度や全国的な動きについてお話いただきました。

◎子どもと家族にとって必要な放課後活動制度化～国会請願採択！

森川氏からは、「全国放課後連」結成(2004年)当初からの願いであった「障害のある子どもの放課後活動の制度化」が、実現にむけて大きく動いてきている(国会請願が2008年12月24日に衆参両議院で採択された)ことが、報告されました。

森川氏の勤務先である埼玉には、東京と同じく自治体独自の制度があり、そのような一定の内容のある制

度があることで、放課後活動を行なう施設は確実に増えていくということを森川氏は感じられていました。



そして、決して容易なことではない「制度化」を求めてきたのは、放課後活動が、子どもにとっても保護者にとってもどうしても必要なものという実感があったからです。これは、保護者や施設指導員等の声からも、全国放課後連が行なった調査からも明らかにされています。

そのような当事者の思いを国会や厚生労働省、に訴え続けてきたことが、国を動かす力となりました。

◎今後の課題～現場からもう一押し訴える

森川氏は、今後の課題として、「具体的に制度の内容を検討するのは、厚生労働省。私たちからは、どのような内容の制度を願っているのかを改めて訴えていくことが必要」と話されました。更に、「独自制度のある地域では、現行制度との兼ね合いについて、しっかり各地域に働きかける必要がある」と強調されました。

◎私たちが目指す放課後活動と制度

中村氏からは、放課後活動を取り巻く法律や、私たちがこれから求めていくべき放課後活動の制度につ

いて、お話いただきました。

全国的な運動が広まる中、2008年7月に、厚生労働省から『障害児支援の見直しに関する検討会』の報告書が出されました。これは、問題点もありますが、学齢期の放課後活動の必要性も明記されていることに意義があります。その後、12月に開かれた『社会保障審議会障害者部会』でも、初めて『障害児支援』の項目が盛り込まれるなど、放課後活動をめぐる動きがいろいろと出てきています。

今後、放課後活動を支える制度が、どのような法律(「児童福祉法」や「自立支援法」など)に位置づけられるのかは、まだわかりません。



中村氏は、「『児童福祉法』も、自立支援法と同様に、利用契約制度や費用1割負担の導入などが、今後検討されようとしている。どの法律に位置づけるかということよりも、1割負担や出来高払い制の問題など、お金の出し方も含めて、どういう内容の制度が必要なのかを訴えていくことが大事」と言われました。

◎運動の成果に確信をもって更なる運動を！

最後に、村岡会長から、「国や都の情勢は厳しく、運動の成果が見えにくい。けれども、国の制度を作る扉を開けようというところまできている。それは、私

たち都の運動が、全国放課後連の動きとタイアップして頑張ってきた到達点。都の既存グループが、存続していることも大きな成果。確信を持ってやっていかなければならない。国の制度も、なるべく都の水準に近い、最大限良い制度になるよう、働きかけていくことが大事。国の制度が不十分ならば、都や区市に、今までの水準になるように求めることが必要。大変だけど頑張っていこう。運動していく上で大事なのは実践。行政や市民に子どもたちの姿を伝え、共感を巻き起こしながら運動していこう」との話がありました。

単なる預かりではない放課後活動——子どもたちの成長をしっかりと支え得る制度を求めて、更に運動を深める必要があると、参加者全体でを確認し合う機会となりました。

＜参加者の感想から＞

新人研修

- ・近藤さんのお話にあった「思いを言葉で伝える」は、子どもたちに対しては実践しているつもりだが、保護者や同僚になると難しい。より良い活動を行うためにも、お互いしっかり向き合い、人の輪を広げていきたい。
- ・「自分が何をしたいのか見失わない」——自分がしたいことは何なのか、見つめ直すことが必要だと改めて感じた。仕事へのとりくみ方を考えていきたい。
- ・自分の中でモヤモヤしていた部分に光があたった。経験ある方の言葉の重みをひしひしと感じた。
- ・とても説得力があり、自分が大事だと思ってやってきたことが、「これで良いんだ」と思わせてくれることがたくさんあった。今度は新しい人に自分も伝

えていかななくてはならないと実感させられた。

全体研修

- ・全くと言っていいほど知らなかった制度について、わずかながら理解が深まった。
- ・不安なこともたくさんあるけれど、みんなで力を合わせていくことが大事だと思った。日々の活動を大事にしながら、運動を進めていければと思う。
- ・国の制度にのっていくことの前進と、東京都として（今の水準が）後退しないように、親、指導員ともに運動を積み上げていかなければならないとつくづく感じた。

＜10年勤続者表彰式も行いました＞

櫻井菜穂さん（小平市・ゆうやけ子どもクラブ）
竹野 晃さん（清瀬市・きよせわかば教室）
宮奥飾里さん（東久留米市・かるがも）
横田真弓さん（東久留米市・かるがも）

おめでとうございます！



『ゆうやけで輝く子どもたち』絶賛発売中！！

「ゆうやけで輝く子どもたち」

出版記念パーティ開催

昨年12月6日、村岡真治さん著書「ゆうやけで輝く子どもたち」の出版を祝う会が行われました。

来賓あいさつは全障研全国委員長の品川文雄さん、乾杯の音頭は竹沢清先生、マジックは佐藤比呂二先生と豪華な顔ぶれでした。

ゆうやけクラブによる村岡さんの紹介VTRでは、「いつも遊んでいるおじさん」「村岡さんも好きだけどお菓子も好き」など子どもたちに慕われる柔らかい人柄が感じられました。しかし、NHKの『首都圏ネットワーク』で放映された映像が流れると、障害児学童の必要性を力説する姿はとても同じ人とは思えない迫力でした。

「家でパニックを起こしてしまう子どもが、ゆうやけに通ってからはパニックがみるみる減っていった。こうした話を聞くと放課後活動の大切さや、楽ではない仕事でも職員としてやってきて良かったと実感できる」と話す村岡さん。

この本がもっとたくさんの人に読まれ、障害児の放課後活動が広まることを、みんなで願いながら盛り上がった楽しい夜となりました。

（レポーター 白石：つみき）

加盟グループ近況

ほおずき(台東区) 報告者: 田添映里

今年度、ほおずきの会は30周年を迎えました。台東区立松が谷福祉会館の母親教室に通う親たちが、「私が倒れたら、この子はどうなるの?」という切迫した不安を抱え、集まり始めたのが発足のきっかけです。その集まりから「学齢部門キッズ」が開設しました。その後、「どのようなハンディキャップがあっても地域で豊かに暮らしていける環境をつくっていく」を目標に、「成人部門ぐるーぷポテト」・「ヘルパーセンターほおずき」・「グループホーム クローバー」と、たくさんの人に支えられて活動を展開し、今年度からは「グループホーム リーフ」が新しく仲間入ります。

30周年を記念して、昨年8月に、『知的なハンディをもつ人たちによるパフォーマンス』と『シンポジウム』を、同会場にて『ほおずき展』を一週間開催しました。『パフォーマンス』は、昨年4月に7人の出演者と関係者で円陣を組み、互いに自由に表現し合い、楽しんで本番を迎えることを誓いました。本番、出演者は舞台の大きさに躊躇することなく、その人らしさがあふれるパフォーマンスを披露してくれ、私たちは7人からたくさんのエネルギーをもらうことができました。『シンポジウム』は「共に生きる～時空と距離を越えたコミュニティの創造～」をテーマに5人のシンポジストを招き、行ないました。ボランティア・職員・保護者・自治体・関係団体という様々な視点から、ほおずきに対しての貴重な意見を聞く機会となりました。そして現在、2月末に行う『30周年記念パーティ』の準備と、『30周年記念誌』の発行のために、あわただしく動いています。

歴史を振り返るたび、たくさんの困難を乗り越えてきたこと、たくさんの出会いがあったこと、たくさんの人たちに支えられて今まできたこと、たくさんのことを今感じています。たくさんのことを忘れず大切に、これからの新たな一歩の糧としていこうと思います。



活動報告 (2008年10月～2009年1月)

- 10/16(木) 事務局会議
 - 20(月) 定例会: 都議会厚生委員会審議の結果を受けて
 - 11/ 6(木) 事務局会議
 - 10(月) 定例会: 内部学習会「思春期と性について」たんぽぽクラブ(江東区) 報告
 - 11(火) 国会要請行動参加
 - 16(日) グループ連シンポジウム参加
 - 12/ 4(木) 事務局会議
 - 8(月) 定例会: 話題提供「ダンス実技」きよせわかば(清瀬市)
 - 1/ 15(木) 事務局会議
 - 18(日) 第11回研修会(於北区赤羽文化センター)
- ※ 定例会議・事務局会議は、いずれも角筈区民センターで行なう。